

本稿は、千葉大学教育学部卒業論文にもとづくものです。調査対象が少ないという難点がありますが、問題提起として意義があると考え、「資料」として掲載させていただきます。

## 親のライフスタイルによる子どものライフスタイルへの影響

### —母親の働き方が子どもの働き方に与える影響—

#### Parents' Lifestyle's Influences on Children's Lifestyle

#### -Influencethat How of Mother Working gives to How of Child to Working-

角田 早紀

千葉大学教育学部学部生

本研究の目的は、親のライフスタイル<sup>1</sup>がどの程度子どものライフスタイルに影響を与えるのかを明らかにすることである。具体的に、夫婦と子どもがいる家庭において、妻（母）が専業主婦であるか否かが、子どもが専業主婦家庭を志向するか否かにどのような影響を及ぼしていると考えられるか考察した。考察の結果から、親のライフスタイルが子どもの考え方に大きな影響を与えていることと、影響の受け方には男女で違いが見られることが明らかになった。母が働いていた環境で育った女性は、ある程度意識的に両親のライフスタイルを真似る傾向が強い。一方で、母が専業主婦であった女性の中には、両親とは異なるライフスタイルを志向する者が少なくないということが、母が専業主婦の家庭に育った女性は、社会の変化を受けて、両親とは異なるライフスタイルを持つようとしている者が多いのだと推測される。ここから、親のライフスタイルと無関係に、子どものライフスタイルを考えるべきではないということの示唆を得た。

キーワード：職業観、専業主婦、ライフスタイル、家庭環境

### 1. はじめに

学校教育では、2003年よりキャリア教育によって子どもたちの職業観を育成する機会を設けている。近年の積極的な取り組みにより、キャリア教育の分野では豊富な実践が行われ、キャリア教育に対する意識は根付いてきている。教育の中で職業観を養うことは大切である<sup>2</sup>一方で、子どもの職業観は家庭環境に依存している<sup>3</sup>と考えられる。

以上の考えをもとに、より具体的に調査するため本研究では母親が社会で働いている環境で育った人と、母親が専業主婦である環境で育った人とで、職業意識に差が表れるのではないかと。そして、インタビューとアンケートを通じて理想のライフスタイルを調査し、その答えとそれぞれの家庭環境をもとに分析をしていった。

## 2. 研究の目的・方法

### 2.1. 研究の目的

本研究では、親のライフスタイルがどの程度子どものライフスタイルに影響を与えるのかを明らかにする。特に、夫婦と子どもがいる家庭において、母親の働き方が子どもの働き方にどのような影響を及ぼしているかを考察する。

### 2.2. 研究の方法<sup>4</sup>

まず、20歳～24歳の男女17名（女性6名、男性11名）に母親が働いているかどうかを詳しく聞いた。上記のインタビューでは、子どもが親から受けた影響を十分に検討できないため、自分と両親のライフスタイルの関係について考察できるように質問項目を追加した。第二段階として、さらに多くの人に調査するため、20歳～24歳の男女43名（女性24名、男性19名）にアンケート調査を行い、インタビュー対象の17名を含む計60名（女性30名、男性30名）について調査結果を考察する。

アンケート調査では、女性自身が将来の働き方についてどのように考えているか、男性の妻の働き方についてどのような理想を持っているか、子ども時代の両親との関わり方による影響はないか、影響があるとすれば、どのように受けているかについて調査する。

・調査対象：20歳～24歳の男女60名

・実施時期：平成21年11月～12月

・調査手法：インタビューは著者の面識のある者を中心に17名に対して行った。その後のアンケートはより多くの者の協力を得るため、SNS<sup>5</sup>で知り合った者に対してメッセージで協力を呼びかけ、協力が得られたものを集計した。インタビュー対象は知人の中で無作為に選んだ。内訳は、大学生16名、フリーター1名である。アンケートの回答

者は大学生35名、フリーター4名、社会人4名である。すべて結婚経験はない。

・アンケート（インタビュー）内容

- ①結婚したとき（子どもが産まれたとき）に働き続けたいですか？  
または、妻に働き続けてほしいですか？  
また、その理由はなぜですか？
- ②自分が子どものころの両親の働き方はどうでしたか？  
両親との関わり方、または家族との関わり方はどのような感じでしたか？
- ③自分の働き方は？  
どんなライフスタイルを描いていますか？
- ④自分のライフスタイルは両親の影響を受けていると思いますか？  
また、どうしてそう思いますか？（この質問をアンケートでは加えた。）  
この質問は、インタビュー対象の17名には聞いていないため、考察には加えていない。

### 3. アンケート調査結果

#### 3.1. 母の働き方と子どもの働き方の関係について

まず、女性の回答について考察する。母が専業主婦であったか否かと自分が専業主婦志向か否かということの関係を表1に示す。

表1 女性の働き方について

(名)

	子どものころ、母が家にいた	母が働いていた
専業主婦になりたい。	11	1
働きたい。	7	11

子どものころ母親が家にいた女性の61.1パーセントが、自分も子どもができたなら家にいたいと答えている。一方で、子どものころ母が働いていた女性の91.6パーセントが自分も働きたいと答えている。全体の中で73.3パーセントの女性が母親と同じ傾向を志向していることがわかり、一つの考え方として、母のライフスタイルが娘のライフスタイルに影響を及ぼしている場合が多いのかもしれない。

ただし、子どものころ母が家にいた女性の38.9パーセントが母のライフスタイルとは逆の傾向を示しており、母が働いていた場合と比較すると母と志向を異にする者が多い。子どものころ母が家にいたにもかかわらず自分は働きたいとしている7名は、働きたいとする理由を以下のように回答している。

- ・生活のため。
- ・自分一人でも生きていけるくらいの収入は得ていたいから。
- ・社会と直接関わってみたいから。
- ・経済的ゆとりがほしい。（子どもの教育費や年に一度の旅行など）
- ・社会との関わりや接点を持ち続けたい。
- ・家計を二人で分担したいから。
- ・社会との繋がりを持ってみたいから。
- ・「男性は仕事、女性は家庭」という考えは、時代錯誤だと思うから。
- ・今のご時世、共働きじゃないと苦しい場合が多いと思うから。
- ・生きていくためのお金を稼ぐため
- ・自分自身の人生を充実させるための一つの手段であるから。
- ・旦那の収入だけでは生活が不安だから。
- ・家にいるだけの毎日はひまだから。
- ・二人で働いたほうがいい暮らしができそう。
- ・自分がどこかで働くことによって、より多くのことを受け入れる心を持つことができると思うから。

これらの理由から、母が専業主婦であった女性については以下のような傾向があると推測できる。

- ①自身の自己実現や生活費・養育費などの家庭の経済力を高めたいと感じている傾向がある。
- ②社会と関わり続けるライフスタイルを志向する傾向がある。

これらから、母が専業主婦であった女性で自らは働きたいとする者は経済的不安を感じていることがわかる。また、社会との繋がりを持ち続けることで自分らしさを追求したいと感じていることがうかがわれる。こうしたことの背景には昨今の終身雇用制の崩壊による夫の雇用不安や女性の雇用環境の整備<sup>6</sup>、さらには家電製品の普及により家事労働が軽減され、女性が家庭の中で果たす役割が少なくなったことが考えられる。

次に、男性の回答について考察する。母が専業主婦であったか否かと自分が結婚した後に妻に専業主婦であることを望むか否か（あるいはどちらでもよいか）ということの関係を表2に示す。

表2 男性の考える妻の働き方について

	子どものころ、母が家にいた	母が働いていた
妻に家にいてほしい	13	0
妻に働いてほしい	0	9
どちらでもよい	1	7

(名)

子どものころ、母が家にいた男性は92.9パーセントが妻に家にいてほしいと考えている。どちらでもよいと答えている人も実際には共働きをすることは考えられないと回答している。一方で母が働いていた男性は、56.3パーセントが妻に働いてほしいと考えており、残りの43.8パーセントはどちらでもよいと考えている。このことから、子どものころ、母が家にいた男性は親の影響を大きく受けており、妻が働くという像を持ちにくいということが推測される。また、母が働いていた男性の約半数は妻の意志に任せたいと考えていることが推測される。

全体として、母のライフスタイルが妻に望むライフスタイルに大きく影響を与えていることがわかる。また、母が専業主婦であった男性のほとんどが妻のライフスタイルを妻に委ねていないのに対し、母が働いていた男性の中の約半数が妻のライフスタイルを妻に委ねる傾向がある。このように、母のライフスタイルが妻の意志を尊重するか否かに影響を与えていることが示唆される。

そこで、母が専業主婦であった者が妻の意志を尊重しない理由をもとに考察する。母が専業主婦であった者が妻に専業主婦を望む理由は以下のとおりである。

- ・専業主婦は遊びに行けそうなイメージがあるため、妻にさせてあげたい。
- ・小さいころに、母親がいないと子どもに影響があると思うから。
- ・家に帰ってきてでもだれもいないと淋しいから。
- ・家庭を癒しの場にしたい。
- ・子どものころは母性の方が大事だと思うから家にいてほしい。
- ・かぎっ子は淋しいと思うから。
- ・自分はあまり得意ではないので、家のことをしっかりやってほしい
- ・家事や子どもの面倒をみてほしい。
- ・子どもは母親からの愛情を受けて育つからその時期に母親が常にそばにいてあげられないのはその子の成長過程で問題になりそうだから。特に、幼少期は母親の愛情のウエイトが高いからできるかぎりそばにさせてあげたい。
- ・自分がそうやって育てられてきたように、子どもの教育に目が行き届き、さらには温かい家庭が築きたいか

ら。

- ・家計が大変でも、子どもには母親がいつでもいる環境で育てて欲しいから。
- ・子どもが心身ともに健康に育つためには、大人のサポートが必須だと思うし、自分がおなかを痛めて産んだ子なら、その子のために思った最善の対処が可能だと思うから。
- ・子どもが小さいころは子どもにかまってやってほしいから。
- ・自分の全国転勤が決まっているから。

これらの理由から、母が専業主婦であった男性には、子どもにとって母親が家にいることが重要だと考えている者が多いことがうかがわれる。母が働いていた男性にはこうした回答が皆無であることと、対照的である。母が専業主婦であった男性は母親が外で働きながら夫婦で協力して家事や育児をする家庭像が想像できないため、自分が育児に参加することに自信がないのかもしれない。また、子どものころ母が専業主婦であった男性の多くの家庭が、母が育児の負担を負っていたことが想像される。父の子育て像をあまり得られていないのではないだろうか。そのため、自分がどのように子育てに参加すればよいかかわからないのではないだろうか。

また、子育てには母性が必要だと感じている者が多いことがわかるが、なぜ母性が必要かということは本研究では扱わない。

次に、母が働いていた者が妻の意志を尊重する理由を、書かれた理由をもとに考察をしよう。母が働いていた男性に妻のライフスタイルを妻に委ねる理由を聞いた問いの回答を以下に記す。

- ・家族は生活できる分は自分で稼ぐので、働くことがポジティブな理由なら働いてほしい。
- ・仕事と家庭の両立ができるなら。
- ・育児休暇は自分がとってほしいと思っている。
- ・奥さんには生活に何かしらのやりがいが見つければよい。
- ・奥さんには育児に力をいれてほしいですが、働き続けたいというなら尊重したいので、二人で話し合って解決策を見つけない。
- ・子どもが産まれたら自分が育児休暇を取りたいから。育児はもしかしたら人生において最も有意義で有無も言わさぬ幸福なものだと最近思うようになったから。
- ・夫婦同士の意見を大切にしたいから。
- ・家計を支えるために仕方なく働かせたくはないが、自己実現の意味でなら是非働き続けてほしい。
- ・妻がやりがいを感じるなら。

これらの理由から、母が働いていた男性は以下のような

傾向があると推測できる。

①女性が自己実現のために社会で働くことを歓迎していることが読み取れる。

②夫婦の意見を大切にしたいと感じている。

このことから、母が働いていた男性は社会で働く女性の像が形成されていることがうかがわれる。

男性と女性の意見を比較すると、男性は女性の意志に任せるという人があるのに対し、女性は男性の意思に任せるという人が少ないことは興味深い。また、子どものころ、親が家にいた男性はほぼすべて妻に専業主婦であることを望むが、子どものころ、親が家にいた女性は社会の変化に対応して、専業主婦を望まなくなっている者が少ないことがわかる。母のライフスタイルが自分もしくは妻のライフスタイルについての考えに影響を与えていることが、男女ともうかがわれるものの、女性の回答には社会の変化の影響も見られる一方で、男性、特に母が専業主婦であった男性の回答からは社会の変化の影響は特に見られない。仮に、妻のライフスタイルについての考え方の一致がなければ結婚が難しいと考えれば、母が専業主婦であった男性にとっては考え方が一致する女性を見つけることが困難であるということがうかがわれる。このことは、非婚化、晩婚化といった問題に対して、示唆を与えるものであろう。

全体として、親のライフスタイルが子どもの考え方に大きな影響を与えていること、そして影響の与え方には男女で違いが見られることが明らかになった。親のライフスタイルと無関係に子どものライフスタイルについての考え方を扱うべきではないということが、示唆されている。

### 3.2. 自分のライフスタイルの両親の影響について

回答者が、両親のライフスタイルにどのような影響を受けていると自覚しているかを、母が専業主婦であったか否かと関連づけて見ていこう。

質問時に「ライフスタイル」の定義が曖昧だったため、回答者は「ライフスタイル」に言及しているとは限らない。また、インタビュー調査では質問していなかったため、アンケート調査のみの結果で考察する。

ここでは、肯定的な影響とは両親のライフスタイルを真似ていることを指す。否定的な影響とは両親のライフスタイルを批判的に捉えていることを指す。

まず、女性の考えるライフスタイルの両親の影響について、表3に示す。

表3 自分のライフスタイルの両親の影響について  
(女性)

	子どものころ、母 が家にいた	母が働いて いた
肯定的な影響を 受けている	4	11
否定的な影響を 受けている	0	0
受けていない	2	2

(名)

母が専業主婦であった女性の66.7パーセントが肯定的な影響を受けていると自覚している。一方、母が働いていた女性の全員が否定的な影響を受けていると自覚している。全体で見ると、79.2パーセントが肯定的な影響を受けていると自覚している。

また、否定的な影響を受けていると回答した女性の中で、母が働いていた女性はいないのに対し、否定的な影響を受けていると回答した者の中で、母が専業主婦の女性は20.0パーセントいる。また、影響を受けていないと答えている女性も、母が働いていた女性はいないのに対し、母が専業主婦の女性では13.3パーセントいた。

特に、母が専業主婦であった者は否定的な影響を受けている人が多い。このことから、自分のライフスタイルが母とは違うと自覚していることがうかがわれる。つまり、母が専業主婦である者は、母のライフスタイルと違ったライフスタイルを持つようとしているということが示唆される。

次に、男性の考えるライフスタイルの両親の影響について表4に示す。

表4 自分のライフスタイルの両親の影響について  
(男性)

	子どものころ、母 が家にいた	母が働いていた
肯定的な影響を 受けている	10	9
否定的な影響を 受けている	3	0
受けていない	2	0

(名)

母が専業主婦であった男性の66.7パーセントが肯定的な影響を受けていると自覚している。一方、母が働いていた男性の84.6パーセントが肯定的な影響を受けていると自覚している。全体で見ると、78.9パーセントが肯定的な影響を受けていると自覚している。

また、否定的な影響を受けていると回答した男性は、母が働いていた男性も母が専業主婦の男性ともいない。また、影響を受けていないと答えている男性は、母が働いていた

男性は15.4パーセントいるのに対し、母が専業主婦の男性では33.3パーセントいた。

このことから、両親と異なるライフスタイルを志向する者は男性にはあまりいないことが読み取れる。

この結果は、第1節の結果とも同様の傾向と言える。すなわち、母が働いていた者は当人たちの自覚としても両親のライフスタイルを真似る傾向が強いのにに対して、母が専業主婦であった女性の中には両親とは異なるライフスタイルを志向する者が少なくない。社会の変化の中で、専業主婦家庭に育った女性のみならず、両親とは異なるライフスタイルを持つようとしている者がいるということになる。

## 4. 結論

### 4.1. 結論

本研究により、子どものライフスタイルは母のライフスタイルの影響を強く受けることがうかがわれた。これは、

最も身近な存在であるからである。自分の両親のライフスタイルしか知らないからという意見もあった。つまり、両親のライフスタイルしか知らないため、自分や妻のライフスタイルを限定的に考えてしまうのである。しかし、他方で専業主婦の家庭に育った女性のライフスタイルは社会の状況の変化に対応することがうかがわれた。

今、学校教育において子どもたちは家庭環境の差異に関わらず一律のキャリア教育を受けている。家庭環境によってライフスタイルの意識が違うので、これを無視したキャリア教育には限界があると考えられる。家庭環境によってキャリア教育を変えていってもいいのではないだろうか。

また、ライフスタイルを多様に考えられるようにするために、自分の両親以外のライフスタイルを詳しく知ることが、多様なライフスタイルの認識に結びつくと考えられる。他のライフスタイルを自分に身近なものとして捉えることは難しいかもしれない。しかし、キャリア教育において、積極的に互いの意見を交換できる場を作ることが、自分以外の新しいライフスタイルの認識につながっていくであろう。

### 4.2. 課題

本研究では、母性が欠けた場合、それが子どもにどのような影響を与えるのかがわからない。また、父性が子どもに対してどのような影響を与えるのかがわからない。父親に育てられたという人の意見を聞けなかった。そのため、なぜ子ども時代に母親の存在が重要視されているのかがわからず、課題として残る。

また、母親の働き方（正社員やパートなど）の区別をしていないため、子どもの受け取り方が曖昧である。そのため、区別が曖昧なもの（例えば、小学低学年から母が働

きはじめて等）があったが、本研究では小学中学年で母親が働いていたか、専業主婦であったかで分けをした。より厳密な分けが課題として残る。

ところで、本研究の調査対象者は、1) 友人、2) 承認制のSNSの中の友人、である。そのため、対象者の多くが四年制の大学生であり、限定的で匿名性が無いデータであったことが特徴として挙げられる。本研究では、対象を限定し、同年齢の集団の中で、親の職業の違いによる子どもの職業観の違いを検討してきた。そのため、今後の課題としては、この結果がどれだけ一般化できるのかについての方向の検討も必要であろう。具体的には、1) 匿名性をもたせる、2) 無抽出によるアンケートをする、などが考えられる。

- 
- <sup>1</sup> ライフスタイルは「生活の様式・営み方。また、人生観・価値観・習慣などを含めた個人の生き方。（大辞泉より）」本研究では特に、夫婦と子どもがいる家庭において妻（母）が家庭外の職業に就くか専業主婦にいるかという点を中心に検討する。
  - <sup>2</sup> 中越敏文、「小学校におけるキャリア教育の必要性に関する研究」、愛知教育大学研究報告書、2009、58、179—187
  - <sup>3</sup> 八重樫・奥山・林・本保・小河（2001）は、「母親の就労形態が女子大生の子育て観や就労観に影響を与えていることが示唆された。」と述べている。八重樫牧子・奥山清子・林基子・本保恭子・小河孝則『母親の就労が女子大生の就労観や子育て観に与える影響について』、川崎医療福祉学会誌、2001、11、245—253
  - <sup>4</sup> 質問項目について一人ひとりに詳しく話を聞くことが出来るのでインタビューが適していた。しかし、調査時間が足りなかったためサンプルが少ないので、より多くのサンプルを得るためにアンケート調査を実施した。
  - <sup>5</sup> ソーシャル・ネットワーキング・サービス。社会的ネットワークをインターネット上で構築するサービスのこと。
  - <sup>6</sup> 男女雇用機会均等法の制定。（1985）